

船尾 修さん (カメラマン)

「ダバオ国」の日本人たち

戦前、フィリピンに三万人を超える日本人コミュニティ「ダバオ国」があった。フィリピンに渡り、戦争に翻弄され、残留した人たち。そしてその子孫。その人生を聞き取り、写真集に収めた船尾さんに聞いた。

——フィリピン残留日本人は、日本ではあまり知られていません。取材のきっかけは？

フィリピンには二〇〇八年に行ったのが最初です。ルソン島の北部のコレディレラ山脈の山岳地帯の、世界遺産に登録された棚田の取材が目的でした。地元・日出町（大分県）で米作りをしてきたので、手作業の伝統的な米作りのことを知りたかった。

棚田への入り口にキヤンガンという町があります。そこで知りあったおばあさんから、キヤンガンが日本と関係が深い場所だと聞きました。おばあさんは当時小学校一年生くらいで、近くにはたくさん日本人の

移民がいたと言う。ハワイや南米の日本人移民の話は聞いたことはありませんでしたが、戦前、日本人が経済移民でフィリピンに行ったと聞いたのは初めてでした。

おばあさんのお父さんには日本人の友達がたくさんいて、家も日本人の大工さんが建ててくれたそうです。「あの人もそうだ」と、おばあさんが、日本人の血を引く人が営む商店に連れていってくれました。四十代の日系三世で、日本とフィリピンの隠れていた歴史を垣間見たように思いました。ここで昔の日本人は何をしていたんだろうと。

——おばあさんは、日本人だから声をかけたのですか。

最初、呼び止められて、「あたし、日本人なんか大嫌いよ」と言われたんです。

キヤンガンのある地域は日本軍が壊滅状態にさせられた場所です。フィリピンを占領した日本は、その後マッカーサー率いるアメリカ軍に巻き返される。レイ

テ島は玉砕し、フィリピンの日本軍は補給路を断たれて追い詰められ、山岳地帯に逃げ込んで持久戦を闘いました。しかし、食料の欠乏から大量の餓死者を出し、現地人を殺害して食料を強奪するといったことを引き起こす。いまでもそういう悲惨な話がたくさん伝わっています。

現地司令官・山下奉文は、日本降伏後の九月二日までに山の中に立てこもっていた。山下大将が米軍に投降して出てきたのがキヤンガンです。おばあさんが山下大将が引く張られて出てきた場所を教えてくださいました。

新天地を求めて

——なぜフィリピンに日本人がいたんでしょう。

移民が始まったのは二〇世紀初頭です。当時フィリピンはアメリカの植民地で、経済的には日本よりも上でした。アメリカ政府の首都は、現在もフィリピンの首都であるマニラです。

しかしマニラは蒸し暑いので、アメリカは山岳部の涼しいバギオに夏の首都を建設しようと、一九〇一年からそのための道路建設に着手します。山の中に分け



●ふなお・おさむ 1960年兵庫県生まれ、大分県在住。アルプスの岩壁を登るクライマーからカメラマンとなる。作品に、ビッグミュー族の世界観を描いた『循環と共存の森から』、大分・国東半島の人々の精神世界を撮った『カミサマホトケサマ』、そして今回の写真集『フィリピン残留日本人』で第25回林忠彦賞を受賞した。